

# イングランドにおけるリーグ・テーブル

## —新聞記事を比較する(3)—

○白鳥 義彦 (神戸大学)

尾中 文哉 (日本女子大学)

大川 清丈 (甲子園大学)

### 1. はじめに

本報告では、イングランドにおいて1992年より導入され、中等教育の各学校のパフォーマンスを示すものとして公表されている「リーグ・テーブル」に注目し、『The Times』紙の記事の内容からこのリーグ・テーブルをめぐってどのような議論がなされているのかを検討する。また、2008年9月にロンドンで行ったインタビュー調査の結果をもとに、リーグ・テーブルが社会の中でどのように受け取られているかを考察する。問題関心の大きな枠組みとしては、日本における全国学力テストでの結果公表をめぐる議論を念頭に置きつつ考察を行ないたい。

### 2. リーグ・テーブルについて

リーグ・テーブルは、Department for Children, Schools and Families (2007年6月に、Department for Education and Skillsから分離創設)によって公表され、『The Guardian』、『The Independent』、『Telegraph』、『The Times』の各紙などにも掲載されている。GCSE (General Certificate of Secondary Education、1988年に従来のGCE [General Certificate of Education] O-Levelに代えて導入) レベルについて見れば、このリーグ・テーブルは、中等教育の各学校の生徒たちの到達・達成度と、各地域ならびにイングランド全体の他の学校といかに比較されるかに関する情報を提供するとされる。とりわけ他の学校との比較ということが明記されているのは注目される点である。

このリーグ・テーブルでは、学校の設立種別、共学/別学、全校生徒数、GCSE試験で英語および数学を含んで5科目以上でA\*からCの評価を得た生徒の比率 (GCSEではA\*からGまでの8段階の成績がつけられるが、進学その他に際して

実質的にカウントされるのはA\*からCまでとされる)、またA\*=58点、A=52点、B=46点、C=40点、D=34点、E=28点、F=22点、G=16点として計算された各生徒の平均点等をはじめとして、数多くのデータが記載されているが、特に興味深いのは、Contextual Value Added (CVA) scores というものが付されていることである。これはKey Stage 2 (通常第3学年から第6学年として知られる、7歳から11歳の期間) の終わりの段階と、Key Stage 4 (通常第10学年および第11学年として知られる、15歳および16歳の期間で、義務教育の最終段階にあたる) の終わりの段階との間での生徒の変化を示し、背景の異なる生徒が入学する各学校の教育の成果を、試験の結果だけではないところから示そうとしたものである。

### 3. 『The Times』における議論

次に、『The Times』の記事に見られる、リーグ・テーブルをめぐり議論を検討していこう。

2005年1月16日の記事では、A\*からGにいたる成績の重みのかけ方次第で、学校による教育に対する評価の数字自体が変わり得ること、またValue Addedな指標は、もともと優秀な生徒が多く集まる学校よりも、伸びる余地の大きい生徒を多く集めた学校の方が良い数字をあげやすいことなどを指摘して、リーグ・テーブルが学校の選択に際して有用なものとはならないと主張されている。これは大きくとらえるならば、データが一人歩きしてしまうことに対する危惧を示しているものとして読むことができるであろう。またValue Addedな指標にもまた問題点が含まれ得るのであり、これは後に見るようにインタビューの中でも指摘されていたところでもある。

また2005年11月20日の記事では、トップ校には男子校よりも女子校の方がずっと多くラ

ンキングされていることが指摘されている。ここからは、リーグ・テーブルといった形での公表がなされるならば、競争的な関心が生じて来ることを読み取ることができ、また男子校／女子校というカテゴリー化が一つの枠組みとして注目されることが明らかになる。

さらにカテゴリー化という観点から見れば、公立校／私立校という区分も記事から見出すことができる。例えば2009年1月6日の記事では、経済状況の変化によって子供を私立学校に通わせることが困難になった家庭の話を通じて、今日における公立校／私立校の関係や、それぞれの学校に対する親および子供の各々のとらえ方が論じられている。

#### 4. インタビュー調査からの知見

『The Times』紙を中心とした新聞記事をめぐる分析と平行して、社会の中でのリーグ・テーブルの具体的なとらえられ方や位置づけを明らかにすることを目指して、2008年9月に、LSEのWest教授、『The Independent』紙のGarner教育担当編集長にインタビューを行った。そこで次に、そこからの知見のいくつかを示したい。

連合王国の中でも、リーグ・テーブルをめぐる対応には差が見られる。ウェールズとイングランドは、当初は同時期にリーグ・テーブルを導入した。1992年、メージャー政権下でのことである。当時、学校はある意味で“secret garden”となっていて、外部あるいは親は適切な情報を得にくいような状況があった。ナショナル・カリキュラムが導入される中で、親がそれぞれの学校の状況を知ることができるようにするというのは、アカウンタビリティの問題からしても重要事であった。しかし、リーグ・テーブルを作成するのは、費用のかかることでもある。ウェールズでは、各学校からのデータはあるはずだが、現在リーグ・テーブルを公表してはいない。またスコットランドは、これまでリーグ・テーブルを作成したことは全くない。スコットランドはイングランドとは異なる、別の教育システム、別の試験システムで動いている。スコットランドには、学校からのデータはあっても、それをもとにしたValue-Addedなデータを作成しているかどうかは疑問である。

リーグ・テーブルという形で各学校に関するデ

ータを公表することについては、イングランドにおいても、ウェールズにおいても、賛否両論ある。しかし、インタビューを通じて、掲載するか否かといったことそれ自身が争点となるようなことは現在はない様子うかがわれる。イングランドでは掲載することが日常化され、ウェールズでは掲載しないことが日常化されている。そうした日常化された状況の中で、イングランドではアカウンタビリティといった観点に留保しつつ、掲載されたデータが利用されているのではないかと考えられる。

また、リーグ・テーブルが公表されることによって、とりわけGCSEでの成績が実質的な評価の対象となるCとDとの間のボーダーラインにいるような生徒への影響がとりわけ大きくなっているという指摘もなされている。

#### 5. おわりに

これまでの考察から理解されるように、イングランドの場合には学校に関する相当詳細なデータが公表されている。また行政側の意図としても、こうしたデータが、進学先の学校選択や、在学中の場合にはその学校の教員との会話に際して、有効に用いられるべきことが明記されてもいる。

リーグ・テーブルという形でデータが公表されるについては、そもそもGCSEという統一的な試験が実施されていたことも、導入を容易にする前提として大きいものがあると考えられる。データが公表されれば、それは確かに様々な形で参照されることとなる。しかし連合王国の中でも、このような形でのデータ公表がなされているのはイングランドのみで、必ずしも普遍的に公表がなされているわけではないというのも興味深い点である。

今後の課題として、新聞記事の中に現れる議論についてのより詳細な分析を進めていくとともに、こうしたデータ公表が実際にどの程度、またどのような形で生徒や保護者たちに利用されているのか、一方データが公表されることによって学校の教育にどのような影響を与えることとなるのか、といった諸点についてより明らかにしていくことを求めている。こうした考察は、日本における学力テストの成績の公開をめぐる論議に対する経験上の有益な示唆を提示することにもつながるであろう。